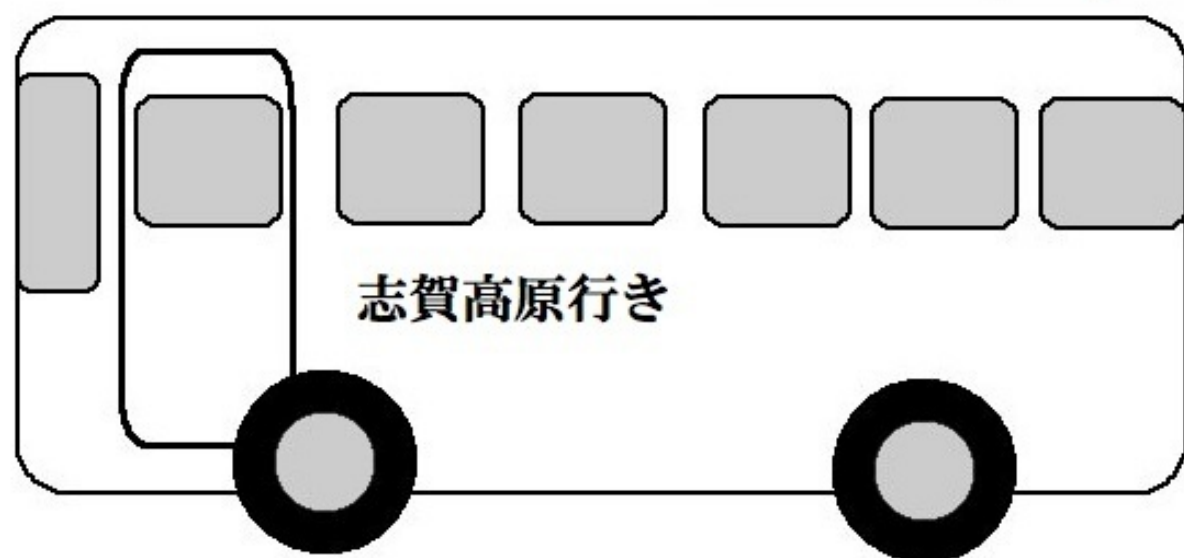


伝説のバス・スキーヤー



こんなことって、あるの？
嘘のような、笑っちゃう話。

スキーバスで志賀高原へ行く途中のハプニング



世の中には「嘘の様な本当の話」というのがあるが真偽の程はいかに。しかし、この話は本当の話である。何故なら、本人が恥を忍んで自ら告白したのだから。そしてその本人とは私のかみさんなのだ。

話のかみさんが短大を卒業して会社に就職した頃にさかのぼる。

その頃は皆、冬になるとスキーに行くのがブームだった。

そのピークは、映画「私をスキーにつれてって」が封切られた80年代後半のバブル絶頂期の頃だが、かみさんの話は、それより少し前の80年前後の頃と思われる。

今の若者はスマホを持っているのが当たり前の時代だが、この時代の若者は冬には皆、スキーに行くのが当たり前だった。

しかし皆がスキー・フリークという訳ではない。スキーは苦手という人もいたと思うし、それ以前に、わざわざ寒いところには行きたくないという人もいたはずだ。

それでも「友達が行くから私も行く」というのが大半の感覚だったと思う。

恐らくかみさんもその一人だった。

そしてこのような若者にスキー場までの交通手段として人気があったのがスキー・バスだった。

ここで、いきなり話は脱線するが、スキー・バスに関しては、私の女友達の話が印象的だ。

バブル絶頂期のスキー・ブームのために週末のスキー場方面の道は深夜にもかかわらず大渋滞が発生するのが常だったが、2月の3連休ともなると、その渋滞は凄まじく、スキー・バスの中で夜が明けて、眠い目をこすりながら、スキー場に着いたのかと車窓を見ると、まだ都内で渋滞に引っ掛かっていた、という笑えない話だ。

結局スキー場にはお昼に着いたという。

当時のスキー・ブームの異常さを伝える話である。

ついでに余談をもう一つ。

異常なスキー・ブームのせいで深夜の交通渋滞は当たり前だった当時、渋滞にはまっている際に、うとうとするのはまだ良いとしても、あろうことか、それが熟睡となり、渋滞が解消しても、その車だけが道のど真ん中で停車し続けているという、まぬけなドライバーを見たことがある。3人乗車してたその車は誰一人、渋滞が解消したのに気が付かず、みんな幸せな顔をしてご就寝中なのだ。

後から来た車は、その車の脇をピュンピュン追い抜かして行く。私たちは思わず笑ってしまった。

あのスキーヤーはいつ自分たちの状況に気づいただろうか？

話を元に戻す。

ある冬、社会人になったかみさんは成り行きで会社の同期の女性たちとバスでスキーに行くことになった。

行き先は志賀高原の一の瀬スキー場だ。スキー・バスの行き先としては、最もポピュラーなスキー場の一つだ。

東京を夜の11時頃出発するスキー・バスは雪道に不慣れな首都圏のスキーヤーにとっては非常に心強い味方だ。

当時、後楽園球場や新宿は、金曜の夜ともなるとスキー・バスの一大ターミナルと化し、スキー場に行く若者でごった返していた。

そしてこの群衆は、スキー場は違えど、スキーに行くという共通の目的の下に、非常な熱気に包まれていた。

おそらく初めてスキーに行く人は、こんなに多くの人がスキーに行くのかと驚いたに違いない。そして次々にアナウンスされるスキー場の名前とバスの乗車時間・乗車位置を聞いて、こんなにもいろいろなスキー場があるのかと、さらに驚いたに違いない。そして自分の乗るバスを間違えてはいけないと緊張するのだった。

私のかみさんも、そのような初心者組の一人だったと思うが、友達と一緒にだったので、はぐれない様にしようとしてだけ考えていたのかもしれない。かみさんは友達と首尾よくバスに乗車し、週末の東京を後に、一路、志賀高原の一の瀬スキー場へと向かったのであった。

志賀高原と言えば、どちらかと言えば東京から遠いスキー場だが、ゲレンデが広い上に雪質が良いので人気がある。

現在は長野オリンピックのおかげで高速道路が整備され首都圏から非常にアクセスが良くなったが、当時は、やっと前橋あたりまで関越道が整備された頃ではないだろうか？

夜行バスなので何回かドライブインで休憩しつつ、朝6時頃にスキー場に到着するように時間を調整しながら運行されるのだが、休憩場所として人気があったのが「峠の釜飯」で有名な碓井峠にあるドライブイン「おぎのや」である。

碓井峠は軽井沢への登り口だが、ここまで来ると気温もかなり低くなり、スキーに行く実感が湧いてくる。

このドライブインは、上信越方面のスキー場に行く全てのスキー・バスが停車すると言っても過言ではない。

というのも「おぎのや」がバスの運転手に対して、お客さんを運んで来てくれる見返りに「峠の釜飯」を無料で提供するからだ。

そのため駐車場は広いのだが、沢山のスキー・バスに加え、通常の自家用車も相まって、深夜だと言うのに大混雑である。

したがって自分のバスの停車位置やバスの特徴をしっかりと覚えておかないと、休憩から戻った時に迷子になり大変な事になる。

しかし、かみさんの場合、それが現実になってしまったのだ。

バスを降りる時は友達と一緒にだったに違いない。

「友達が降りたから私も降りる」と言う訳でもないと思うが、一緒に降りた気安さから、バスの停車位置や特徴の確認が甘かった事は否めない。

深夜のドライブインはスキーヤーでごった返しており、出発地の後樂園の熱気が、そのままここに移動して来た感じである。

まずはトイレに行き、その後、店内に売られているお土産を見たり、飲食をするのがお決まりのパターンだが、ここに魔の手が潜んでいた。

女性トイレは大勢のスキーヤーによって順番待ちとなり、友達と一緒に行っても、その後、友達とはぐれる危険があるのだ。

かみさんの場合、先に用が済んで店内を一人でふらついてしまったのか、最後になってしまい友達とはぐれたのかは解らないが、いづれにせよ、一番一人になってはいけない人が一人になってしまった。そして出発時間になりバスへ戻ろうとした時、バスの停車場所が分からなくなってしまったのだ。

おそらく非常にパニックたのではないだろうか？

暖房のためにバスはエンジンをかけたまま停車しているが、そのために排気ガスが充満している駐車場の中を泣きそうな顔をしながら、停車していたはずの場所の周辺を何回も探しまわったに違いない。

その様子を目にした別のバスの運転手が彼女に声をかけた。

「どうしたの？バスが見つからないの？」

「そうなんです。ここに停車していたはずなんですが」

「どこのバス？」

「XXXXXXXX 交通です。XX色のバスなんです」

すると、その運転手は「あ、そのバスなら、さっき出発したよ」と言う。

「え！本当ですか？」

「ああ。出て行くところ見たんだから本当だよ」

「えー、どうしよう」

「時々こういう事があるんだよ。どこのスキー場に行くの？」

「一の瀬です。志賀高原の」

「あ、それなら、このバスも一の瀬に行くから乗せてってあげるよ」

なんと、かみさんは、この親切な運転手の救いによって、別のバスで一の瀬スキー場へ向かう事になったのであった。

かみさんは借りて来た猫のように、ちょこんとバス・ガイド用の椅子に座って今や遅しと出発を待つ事、数分。

突然、聞き慣れた友達の声がしてきた。

「なにやってるの？ そのバスじゃないでしょ？ ずーっと探したんだから！」

見ると怒った顔をした友達が、そのバスの乗降口に立っていた。

「あれ？ 出発しちゃったんじゃないの？」

「そろってないのに出発するはずないでしょ？」

「だって、この運転手さんが、私のバスが出発するのを見たって言うから」

「何言ってるの？ そんな訳無いでしょ？ 早くバスに乗って！ みんな待ってるんだから！」

かみさんは友達に呆れられながら、トボトボと本来のバスへと向かったのであった。

本当にバスが出発しちゃうことってあるのだろうか？

バスの運転手は若い女の子と話がしたくて適当な事を言ったのだろうか？

案外、何人の女の子を騙せるか、運転手同士で競っていたりして。

今だったら携帯があるので迷子になることはないだろうけど、携帯のない当時はシーズンに1回や2回は本当にバスが出発しちゃうこともあったかもしれない。

かくて、私のかみさんは「伝説のバス・スキーヤー」の殿堂入りを果たしたのであった。

そしてその伝説は、その後も30年以上勤めている会社の中で、今も密かに語り継がれているかも知れない。

極秘事項として。